

2013年度秋季研究発表会プログラム

11/9(土)						
セッションNo	講演No	開始時間	終了時間	講演者	タイトル	発表要旨
開会挨拶など (星野悦子先生)		13:00	13:05			
セッション1 座長 松井淑恵先生	講演1	13:05	13:30	松永理恵(静岡理科大学総合情報学部), Pitoyo Hartono(中京大学工学部), 阿部純一(北海道大学)	ニューラルネットワークモデルによる西洋音楽と日本伝統音楽の調性識別: Restricted Radial Basis Function (RBF) Network を用いた検討	本シミュレーション実験では、ニューラルネットワークの学習後の内部構造を可視化するrRBF法(Hartono & Trappenberg, 2013)を用いて、西洋音楽と日本伝統音楽の両方を学習するにつれてネットワークの内部構造がどのように変化するのかを報告する。そして、結果を基に、人間のbimusicalな聞き手の心内において2種の異なる調性スキーマがどのような形で学習され、表象されているのかという疑問に対する仮説の提案を試みる。
	講演2	13:30	13:55	上野哲史, 根本 幾(東京電機大学大学院情報環境学研究科)	「多義的」旋律に対する脳活動のMEG計測	『多義的』旋律を聴いた時に、人はどのように感じ取っているのか、脳内の音処理のメカニズムを解明したい。本研究では多義的旋律を非注意条件下で聴いた時、どのような脳活動をしているのかMEG(脳磁図)を用いて測定する。
	講演3	13:55	14:20	◎小野健太郎, Christian F. Altmann, 松橋眞生, 美馬達也, 福山秀直(京都大学医学研究科)	音の消失知覚に与える知覚的体制化と音楽経験の影響	音列知覚における知覚的体制化の影響を調べるために、音列中の音の消失に対する脳活動を脳磁図で測定したところ、音楽経験の有無に関わらず、体制化の影響と思われる脳活動の増加が聴覚野周辺において見られた。
休憩(15分)		14:20	14:35			
セッション2 座長 安田恭子先生	講演3	14:35	15:00	◎森本智志(九州大学大学院芸術工学府), Gerard B. Remijn(九州大学国際教育センター), 中島祥好(九州大学大学院芸術工学研究院)	和音進行の期待に関する計算論的解析	和音進行の聴取時に知覚される次時刻の和音への期待は、特に調性音楽において重要な音楽的機能のひとつである。本発表では心理実験に基づいて期待を生じる内的な計算過程をモデル化し、その特性について議論する。
	講演4	15:00	15:25	菅 千素(和歌山大学教育学部)	数値計算による音響刺激WAVファイルの作成法(2)	前報(H25春季研究発表会)では波形情報を数値計算で定めてから、それをWAVファイル化する方法について報告した。その際、波形を数値計算で直接求めたことに不具合があったため、その代替策としての逆フーリエ変換による改良版について今回は報告する。
	講演5	15:25	15:50	難波精一郎, 桑野園子(大阪大学)	音色の精神物理学的指標—CI (Comfort Index)を巡って	演奏音のテンポ、大きさ、ピッチなどには計測された時間、ラウドネスレベル、周波数など物理的評価指標が存在するが、音色には特に定まった指標はない。難波・桑野らが提案するCIの音色への適用例について紹介する。
休憩(15分)		15:50	16:05			
チュートリアル 司会 谷口高士先生		16:05	17:35	津崎 実(京都市立芸術大学音楽学部)	音楽知覚認知研究におけるSTRAIGHTの可能性と活用法	
表彰式		17:35	17:45			
懇親会		18:20	20:20	会場: 中国料理 珍宴		

2013年度秋季研究発表会プログラム

11/10(日)

セッションNo	講演No	開始時間	終了時間	講演者	タイトル	発表要旨
セッション3 座長 古賀弘之先生	講演7	9:30	9:55	酒井博美(東北大学大学院医学系研究科), 望月登志子(日本女子大学人間社会学部), 上月正博(東北大学大学院医学系研究科)	ダウン症児におけるリズム知覚の特徴と促進の手立てー視覚的補助を用いた試みー	ダウン症児3名について、リズム知覚にどのような特徴があるか、またリズム反応の獲得方法について検討した。その結果、リズム知覚においては、リズムを「時間的ゲシュタルト」として知覚することに困難さがあること、リズムパターンの呈示方法がリズムの把握に影響を与えることがわかった。さらにリズム反応の獲得では、リズムの構造による違いがみられ、経験の繰り返しのみではない工夫がなされることの重要性が示唆された。
	講演8	9:55	10:20	徳田幸絵(長浜バイオインキュベーションセンター)	認知症高齢者への音楽療法におけるエピソード記憶の想起および表情に関する検討	筆者は、認知症高齢者を対象としたグループホームにて集団音楽療法を行っている。認知症高齢者のQOL向上を目的とした音楽療法を実践していく中で、特に記憶想起の観点よりPAC分析を行った結果、10代の頃のエピソード記憶の想起が活性化される傾向が見られた。さらにエピソード記憶が活性化されることによって、参加者の表情やコミュニケーション等の行動においても改善傾向が見られた。
	講演9	10:20	10:45	◎富永仁志(京都大学大学院人間・環境学研究科), 山崎晃男(大阪樟蔭女子大学心理学部), 内田由紀子(京都大学こころの未来研究センター), 宮本百合(ウイスコンシン大学心理学部)	ペア合奏が認知傾向と感情経験に及ぼす影響について	対人合奏が、包括的・分析的として捉えられる認知傾向や、感情経験に対して持つ効果を検討するために、実験室にて鉄琴を用いたペア合奏を含む実験を行った。ペアのパートナーと合奏する条件と、コンピュータから再生される音源と合奏する条件の2条件を用意し、録音内容の演奏分析から得られたデータと、枠と線課題 (FLT) や質問紙から得られたデータの関係を比較分析した。
休憩 (15分)		10:45	11:00			
セッション4 座長 江村伯夫先生	講演10	11:00	11:25	◎池上真平(青山学院大学大学院教育人間科学研究科), 重野 純(青山学院大学教育人間科学部)	グルーヴ感と音楽の印象の関係	グルーヴ感が音楽のどのような印象とかかわりが深いかを検討するために、様々なジャンルの楽曲を刺激として用いて印象評定実験を行った。その結果、グルーヴ感の強弱は、音楽の活動性、リズムのとりやすさ、気持ち良さとの深い関係にあることが分かった。
	講演11	11:25	11:50	◎米田 涼(金沢工業大学大学院工学研究科), 山田真司(金沢工業大学)	楽曲メタデータを用いた音楽の感性検索システムの構築	過去に提案された音楽の感性検索システムの多くは音響情報に基づいたものであったが、本研究では、人が楽曲を聞いて判断したメタデータを基にし、音楽の感性検索システムの構築を行った。
	講演12	11:50	12:15	山崎晃男(大阪樟蔭女子大学心理学部)	音楽と絵画のマルチモーダルな相互作用に及ぼす提示時間の効果	マルチモーダルな交互作用について検討するため、音楽が絵画の印象に及ぼす影響と絵画が音楽の印象に及ぼす影響とを比較した。その際、両刺激の提示時間を変化させ、交互作用がどのように変わるかを検討した。
	講演13	12:15	12:40	谷口高士(大阪学院大学情報学部), 大出訓史(NHK放送技術研究所), 安藤彰男(富山大学工学部)	聴覚的臨場感に関する基本印象語・複合印象語リストの検討(3)ー再生チャンネル数を操作した22.2ch音響の印象比較ー	これまでの研究に基づいて提案した、聴覚的臨場感に関する基本印象および複合印象の測定尺度について検討するために、再生チャンネル数を操作した22.2ch音楽コンテンツの主観印象評価実験を実施した。基準となる音源としてNHKによるオリジナル録音の古典音楽、現代音楽、ジャズ各1曲の3種類を用いた。実験協力者は成人女性20名であった。複合印象プロフィールを中心に結果を報告する。
閉会挨拶など (星野悦子先生, 西村 明先生)		12:40	12:45			

◎は研究選奨受賞対象者を示す。